

旧第3通学区「高校の将来像を考える地域の協議会」第1回会議 議事録

I 日 時 令和元年6月26日(水) 15:00~16:50

II 会 場 長野市役所第1庁舎 5階 庁議室

III 出席者 協議会委員20名(代理3名)

IV 次 第

- 1 開会
- 2 あいさつ(加藤久雄 長野市長)
- 3 協議会の設置について
- 4 自己紹介
- 5 座長、副座長選出
- 6 議事(V議事参照)
- 7 その他連絡事項
- 8 閉会

V 議 事

- 1 協議日程について
特段の意見無し。
- 2 説明事項について
旧第3通学区の各校の取組・現状及び高校改革について
特段の意見無し。
- 3 意見・感想・現状等について
委員より、以下のとおり発言があった。

- 実際に再編を考えた時、目指す姿と実際の配置の結び付けについて困難が生じるかもしれない。
- 企業の立場として、高校改革にどのような役割を果たせるか考えていきたい。
- 農業分野においても少子化は大きな問題である。
高校、中学を含めた教育をどうするかと言ことも含めて、理想と現実とをどうマッチングさせるかが重要な課題であることをあらためて感じた。
- 失敗が許される社会というところに興味を持った。子ども達が進学していく中で、いろいろな挫折と失敗とか経験していくと思うが、しっかりケアできる場所があればいいと思う。
また、施策の推進にあたっては、先生方が取り残されないようなケアをお願いしたい。
- 具体的な少子化の資料を見て、現実的にいろいろと考えていかなければいけないタイミングなのだと実感した。
中山間部の小規模校と都市部の大規模校といったような格差がある中、保護者の関心は、「うちの地区の学校は残るのか」というようなことにも及んでいる。これを機会に様々なことを考えていけると良い。
- 先ほどこの地区の高等学校の現状について、若干、学びの改革という部分でお話しさせていただいたが、今、教育の中で改革というものが本当に必要だという認識は、校長あるいは

教員の中にも非常に多い。

長野市の中の都市部校でさえクラス数が減少している中、学びの改革だけでなく、再編整備という部分についてもかなり危機感を持っている。

全県の中でも小さい学校で、それがまたさらに小さくなっていくということが、生徒のために良いのかという点で非常に危機感を持っている。出来るだけ早い段階で、何らかの判断をしていくことが必要だと思う。

- 旧第3通学区の中学校の卒業生数の予測を見て、これは本当に大変なことだなと思った。ある学校では、昭和から平成に変わる年の全校生徒数と、平成から令和に変わる年の全校生徒数を比較すると半数以下に減っている。
また、多様な学びということで、3つの方針が各校これで示されることになるが、現状で行くと中学一年生が入試の時にあたる為、それぞれの学校がどういう方針かということを、なるべく早く示してほしい。
- 教育が新しく変わっていく際には、自分自身も意識を改革していかなければならないと感じた一方で、人口減少に係る問題は極めて現実的である。
地域の中にある中山間地の高校は、非常に大きな地域としての財産であるから、県立高校だからといって県で考えれば良いという考えは、今は持っていない。
特色のある高校として、いかにより多くの子供たちに魅力を感じて来てもらえる環境を整備するかという様な、発展的な考えをしていただけるとありがたい。
- 大学においては、生き残りをかけた改革はすでに始まっている。
高校が特色を考えることは、高等教育の充実にもつながっていくので、そういう観点からもしっかりと考えていきたい。
- 魅力ある学校づくりと、少子化に伴いどの学校をどのように減らすかという事の議論はどこでマッチングしていくのか、非常に難しいと感じる。
また、私立高校はこの現状をどのように受け止めているか、情報として知りたい。
- 地域にとっても、高校は大切な存在である。高校の連携を図っていきたい。
今後、先進的な取り組みを行っている高校についても参考にしたい。
また、通信制の高校の在校生が非常に多いと聞いている。通信制の高校がどのような授業をしているのか、これからについてどのような見通しでいるのかということも、進路先の選択に影響してくると思うので、知りたいところである。
通信制の高校についても知っていく中で、学びの方向性についても検討していきたい。
- 少子化は非常に大きな課題である。学校が小規模であるがゆえに、子育て世代が移住を躊躇するという事もある。
問題を先送りすることなく、今からできることをみんなで知恵を絞りながら考えていく必要があるとあらためて感じた。
- 少子化に加え、今の小中学校において、なかなか学びができていけないお子さん方が増えてきていることを考えると、高校の少子化の問題と同時に学校の在り方そのものが大きな問題

となってくるのだらうと思う。

学校の在り方を考えたり、変革したりしていかなければいけないのだらうと思うが、さらに高校ではどう学ぶをしていくのか、高校に行かない生徒も増えてきているという現象の中で、その辺を踏まえながら、どの様な計画を作っていくかという視点が必要である。

どこの位置にあるかということより、子どもたちの学びをどう保障していくのか、子どもの視点からも議論を進めていかないと、なかなか高校の在り方は決まっていけないのではないかと感じる。

- 小中学校の数が少なく、入学生が急速に減ってきている。

探究的な学びや、対話的なクラブ活動を展開するには、ある程度生徒がいないと難しいので、子どもたちの学びの質の保証ということを考えると、ある程度の学校の規模は欲しい。

- 高等学校という「箱もの」を中心に考えていくと、今の現状は、高校の数を減らすとか、山間部をキャンパス校にしていくとか、学級減をしていくとか、箱をどう整理していくかという発想になってしまうと思うが、今の高校教育の中で必要なのは社会で学ぶということであり、高校生も社会で、地域で育てることを大事に考えている。子どもたちが学校という箱に行って何を学ぶかではなく、遠くの学校まで交通費をかけていかなければいけないという発想ではなく、最近の若者の中には、通信制の高校がすごく人気になってきている。今、通信制の高校の歴史的役割が、もともと通信制がつくられた時と変わってきている。

今の若者たちが何をどう学びたいのかを反映していると思う。例えば地域の子どもたちが、学校という箱に行かなくても、地域の農家で、農業で、または地域の企業で、地域のいろいろな会社で、課題を持って取り組んで、課題解決をしていく。そしてそれを地域も育てていくし地域貢献にもつながるし、それが高校の単位としても認められていく様な学びの形というものに焦点を当てていかないとこれからの高校教育は出口がみえてこないと考える。

- 高校と小中学校との連携、高校と大学などの高等教育との連携はどのようなものになるか、また、家庭というものはどのようなものになるか不安になった。

学校の規模という数字だけで区切って考えていかなければいけないとなると違和感を感じる。学校という枠組み、数だけの枠組みでは、しばれない、考えられない部分というのがこの新しいコンセプトではあるのではないかという感じがする。大変難しい問題であると理解している。

- 生徒が減少するのと将来像のマッチングがとても難しい課題であることを改めて認識した。

商工業の観点において一番の問題は、後継者不足と人手不足であり、産業界として、教育と連携を持って考えていかなければならないという認識をもったところである。

- 人数の予測を見て、かなり厳しい状況だと実感している。山間地域から長野市内の高校に通うことは金銭的にも時間的にも非常に大変であるから、本来であれば地域にも学校を残していただければと思う。何とかいろいろな知恵を出していただいて、中山間地の高校生、親が困らないような形になんとかしていただきたいと思う。

- 高校改革で夢のある方向に向かっていくということで非常に感動した。高校生の可能性、意

欲を地域の住民がより知ることにより、高校生と一緒に活動していきたいと思い、活動にながっていく様、期待感を持っている。